京都西寿寺本尊の丈六阿弥陀如来坐像について

―移坐の経緯と製作年代―

浅湫　毅

はじめに

本論で取り上げる阿弥陀如来坐像（図版1）は、京都西寿寺の本堂に本尊として安置される丈六像である。後述のように、その製作年代が平安時代後期にさかのぼると想定される像でありながら、まったくの未指定作品で、かつ、これまでほとんど紹介されたことがないものである。幸いにして筆者は本像を調査する機会を得、いくつかの知見を得ることができたのでここに紹介し、諸賢のご教示を仰ごうとするものである。

さて、京都国立博物館では例年社寺調査を行なっており、それとは別に各研究員が個人的に社寺において作品調査を行なっている。本稿も筆者が何人かの彫刻史研究者とともに行なった調査にもとづいている。調査は平成十六年九月に行なった。[1]

これらの調査によって、それまで知られていなかった作品が発見されることはよくあることで、そのたびに京都というところの奥深さを思い知らされるのではあるが、それでも平安時代の作とみられる丈六仏が「発見」されるというのは、まずそうあることではない。この西寿寺の本尊像はその稀有な例といえる。ここで「　」付きで発見と書いたのは、これまで本像の紹介がまったくなされてこなかったわけではないからである。しかしながら紹介といっても戦前に出版された美術書に若干の記載があるのみで、それ以来本像の存在は美術史的には知られていなかったものといってよいだろう。

この像の存在を筆者が知るにいたった経緯は、西寿寺の村井定心住職より、現在当館にご寄託いただいている像高五二センチあまりの阿弥陀如来坐像を、一度どんなものか見てほしいとの電話をいただき、寺を訪れたことに始まる。この像に関しては別稿で紹介しているので、詳しくはそちらをご参照いただきたいが、[2] 鎌倉時代にさかのぼる優品であった。その旨をお寺の方に告げ、さらには像に傷みがみられるので修理をする必要があることなどを申し上げたところ、そんなに貴重なものならと修理後当館に寄託していただけることになった。通常であればそこで話は終了するのであるが、調査後にその像が安置されていた本堂の本尊を見上げると丈六の阿弥陀如来像があり、ご住職に伺うとこれまでどこにも紹介されたことはな

いということであった。[3] そのことに驚くとともに、すぐさま近いうちに調査ならびに撮影を、とお願いしたのであったが、博物館が独立行政法人化をむかえる節目でもあり、展覧会の準備、開催などがたて続いたこともあって、ようやく平成十六年の秋に実現の運びとなったものである。

一、西寿寺について

まずは、本像を安置する西寿寺についてみておこう。

西寿寺は泉谷山と号し、京都市右京区鳴滝にある浄土宗の寺院である。ちょうど周山街道の入口あたりに所在する。街道から北に入った谷あいに瀟洒なたたずまいを見せている（図1）。

寺の縁起を記した『泉谷山西寿寺伝記』（図2）によると、袋中上人に私淑した伊勢松坂出身の北出嘉兵衛により、寛永四年（一六二七）に袋中上人を招請開山として創建されたという（史料1—①）。造営にあたっては山を崩し、谷を埋めて寺地を開いたといい、その際に神石が出現し、そこより清水が涌出したので泉谷山と号したという（史料1—②）。その後、第五世単誉愚故上人によって、現本堂が建立されるなど中興がなった。明治の神仏分離に際して一時荒廃したが、尼寺として復興され現在にいたっている。

図1　西寿寺本堂

図2　『泉谷山西寿寺伝記』

二、本尊阿弥陀如来坐像の像容および構造

本像は、愚故上人によって中興された際に建立された本堂に、本尊として安置される阿弥陀如来坐像で、像高二七六センチをはかる丈六の巨像である。[4] 今回の調査では両側部、定印を結ぶ手部、脚部、

図４　左体側部

図３　左体側からみた像内

裳先など、可能なかぎり部材を外して調査することができ、構造および像内の彫や銘文などを確認することができた（図３～７）。

さて、穏やかで円満な相好を有する本像は冒頭でも述べたように、平安時代後期の作風を有するもので、宇治平等院鳳凰堂の本尊像を代表とする定朝様の延長線上にあることが理解される像である。像容も鳳凰堂像にほぼ準じる姿であるが、あらためて確認しておく。まず、頭髪は螺髪とするが旋毛ではない同心円状の段差を刻み、肉髻珠、白毫には水晶製のものを嵌入する。眼は半眼にし、口を閉じ、耳朶は環状にあらわす。首には三道を刻む。袈裟を偏袒右肩に著し、衣端で右肩を覆う。腹前で第一・二指を捻じた阿弥陀の定印を結び、右脚を前に結跏趺坐する。蓮華座上に坐し、円光を背負う。

構造は、体幹部に前後左右四材を寄せる寄木造で、表面は漆箔仕上げである（ただし金箔は近世の後補）。以下、品質構造の詳細を

図５　右体側部を外したところ

記す。

木造、寄木造で、肉身部、衣部ともに漆箔を施し、頭髪、眉、瞳、髭などに部分的に彩色を施す。木寄せは、体幹部を正中および両肩を通る線で前後左右の四材矧とし、さらに体側部との間に左右とも前後それぞれに一材ずつマチ材をはさみ（あるいは、体幹部は前四材、後四材を矧寄せるというべきか）、さらに体側材を矧寄せる。左体側部は前後二材と袖部一材の計三材からなり、内部に設けた後補の木組み（桟）によって体幹部に引っ掛ける。右体側部は肩から前膊までを一材から彫出し、蟻枘によって体幹部に固定する。右腰部には別に一材を寄せる。頭部は前後三材からなり、頭頂部には別に一材を矧寄せる。頭体の接合は、現状では後補の桶状の大きな枘によって三道下で差首とする。定印を結ぶ手は左右共木で、手首で矧ぐ。脚部は上下前後に横木四材（後方下部の材は内刳で左右がつながっていないため左右で材が異なる可能性もある）を寄せ、裳先には別に一材を枘差とする。像内は平滑に内刳られ、現状では黒漆が一面に塗られ、後補の木組み（桟）によって補強および各部の連結がなされる。像内背面に朱漆による再興銘あり。後補部分は漆箔、彩色、肉髻珠、白毫、両手首先、裳先、および螺髪の一部、像内の黒漆および木組み（桟）、さらには頭光および台座である。台座上面には寄進者名を朱漆で記す。漆箔および彩色は、江戸でも比較的新しい時期の後補かとみられるが、それ以外の頭光および台座をはじめとする後補部のほとんどは、後述のように江戸初期に当寺に移坐した際のものと思われる。

図6　脚部を外したところ

図7　脚部

三、これまでの紹介

冒頭でも述べたように、本像はその存在が長らく気付かれずにあったのだが、まったくの未紹介であったわけではない。

たとえば昭和八年（一九三三）に発行された『京都美術大観』では、「定印に安住した姿は藤原時代通有の形相であるが、袈裟の手法が形式的であり且力弱いところがある点からみると、鎌倉時代に入ってからの作であろう」というように鎌倉時代の作として紹介されている。[5] また、昭和十八年発行の『別尊京都仏像図説』においては室町時代の作として紹介されている。[6]

しかしながら、本像が美術史上、文化財行政上必ずしも重要な像であるということを皆が認識していたわけではないことは、第二次世界大戦中に京都府によって行なわれた調査の台帳である『京都府寺院重宝調査台帳』には、西寿寺の項はあるものの、本像に関する仏像調書は収載されていないことからも窺える。

戦後、なぜか本像の存在は彫刻史研究者はもとより誰からも言及されることなく、平安時代にさかのぼる丈六像という重要なものでありながらも、どこからも文化財として指定・登録されないままに置かれ、今日にいたっているのである。[7]

四、伝来について

本像が、平安時代後期にさかのぼる古像とみられることはすでに述べたが、それを安置する西寿寺は、寺伝によっても創建が江戸時代初期の寛永四年（一六二七）にまでしかさかのぼり得ず、それよりもはるかにさかのぼる本像が、移坐像であることは確実である。では、丈六という巨像がいったいどこから運ばれてきたのであろうか。

その経緯に関して、当寺の縁起をしるす『泉谷山西寿寺伝記』に詳しく述べられている。それによると、開山の袋中上人から四世までは現在の方丈を本堂とし方丈仏を本尊としてきたが（史料1—③）、当寺を中興した第五世の単誉愚故上人が本堂の建立ならびにそこに丈六仏を安置することを発願。万治元年（一六五八）に、江州甲賀郡杣二十二村の氏神で、上野村（現在の滋賀県甲賀市甲南町）に所在する新宮大明神の本地仏が朽損し、修復困難であることを聞き、移坐を計画したという。そして、弟子の頼入を村に遣わして、社僧法印、村にある浄土宗の善願寺、村中の檀家を頼み乞い求め、馬三匹に乗せてはこぶ（史料1—④）。八部分にわかれていた本尊を大仏師の弟子太左衛門が接合し、その手間料である銀三百目は浦辻宗与が寄進し、光背台座は大仏師光教が作り代金銀二貫目は井川六郎兵衛が施主となり、翌万治二年十月十五日に成就したという（史料1—⑤）。

以上、寺伝によると、本像は万治元年に滋賀県の新宮神社の本地仏を移坐し、翌年までに修復および台座光背の新補を行なって、おそらくは翌三年の本堂造立（史料1—⑥）に際して安置したものということになる。ここで問題となるのがその信憑性である。まず、寺の縁起である『泉谷山西寿寺伝記』は紙を継いで折本としたものだが、残念ながら奥付を含んだ末尾の部分を何紙か亡失しており、書写年代については不明である。ただし、紙質や文字の体裁などか

ら判断して、さほどさかのぼるものとは思えない。文中に元文二年（一七三六）の記事がみられるので、すくなくともそれ以降である。しかしながら書写された内容は、特に本尊の移坐に関しての部分など、掛かった経費およびその出資者まで記しており、きわめて具体的である。書写年代は下ったとしても、もととなった史料は正確な内容を伝えていたと考えてよいのではないか。したがって、移坐に関しても事実を伝えているとみて問題なかろう。部材を外して調査した結果も、内部の木組みや黒漆など江戸期の修復痕が確認された。また台座上面には、本尊の移坐、補修よりも若干後の年号ではあるが、寛文二年（一六六二）の朱漆銘（資料3）があり、光背もこの時期の新補とみてまず間違いないもので、寺伝の伝えるところと大きく矛盾はしない。

図8　像内背面朱漆銘（赤外線写真）

また、今回の調査では各部材を可能な限り外して像内を調査することができたが、像内背面に残された朱漆銘（図8）が確認され、それも移坐の事実を補強するものであった。銘文に移坐したということは記されてはいなかったが、単誉上人愚故によって万治二年十月十五日に再興された旨が記されていたのである（資料2）。これは縁起に記された復興成就の時と月日まで一致している。

では次に、本像を移坐してきたという江州甲賀郡の新宮大明神についてみておこう。

新宮大明神は、現在新宮神社と称し滋賀県甲賀市甲南町新治に所在する旧村社である（図9）。祭神および由緒は『甲賀郡誌』[8]によると、一宮は伊弉冊命を祀っており、天平四年（七三二）に紀州より熊野大明神を勧請し、延暦年間（七八二～八〇六）に現在地へと遷座したもので、二宮は速玉男命を祀り、

図9　新宮神社

長和二年（一〇一三）に常陸国より鹿島大明神を勧請したものという。また、三宮は天忍穂耳命を祀り、近世に遷座したものであるらしい。[9] そして、同書によると当社にはかつて「福寿院」「満福寺」という神宮寺があったという。

現在神社を訪ねると、境内一杯に社殿が建ちならび、どこに本像を祀った本地堂があったのかと思うが、かつての境内地はかなり広大であったようである。というのも、本神社の表門（図10）は、現在国の重要文化財にも指定される八脚門で、[10] 大斗に文明十七年（一四八五）の年号を記す墨書があるのだが、ここから現在の境内まではかなり距離がある。図11はこの表門のあたりから境内を見渡したものだが、社殿手前の現在保育園が建つあたりが、かつては福寿院の寺地であったという。[11] このあたりが、かつて丈六仏を安置していた本地堂の場所かとも想像される。

この新宮神社の位置は、甲賀から伊賀へと通じる伊賀街道沿いの場所で、交通の要衝でもあり、国の重要文化財にも指定される表門が残されていることからもわかるとおり、当社およびその神宮寺は、かつて大規模な社殿および伽藍を構えていたことが想像される。また、滋賀県内には安土の浄厳院、湖東の善明寺、野洲の仏性寺などにも、優れたできばえの平安時代後期にさかのぼる定朝様丈六阿弥陀坐像が残されており、甲南の地に都風の丈六仏が安置されていたとしても驚くにはあたらないだろう。

以上、西寿寺の寺伝および像の調査結果と、像がもと安置されていたという新宮神社の状況の両面からみてきたが、本像が新宮神社の神宮寺から移坐されてきたことを否定する要素はまったくなく、寺伝のとおりに移坐されたものとみてよいかと考えられる。

図10　新宮神社表門（重要文化財）

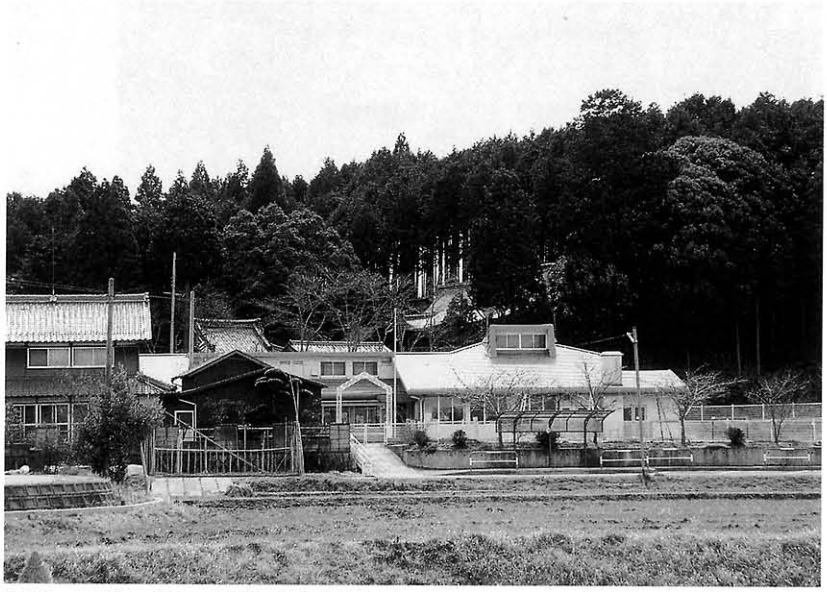

図11　手前の新しい建物が保育園

五、製作年代について

定朝様の延長線上にあると考えられる本像であるが、では平安時代後期のどこに位置づけられるものであろうか。西寿寺の寺伝は移坐の経緯こそ詳しく語るものの、造像当初の状況については当然のごとく伝えるものがない。また、当初安置されていた新宮神社にもそのことを伝える史料はおろか、推定を可能にする材料すらなく、史料の面からは具体的な創建年代を知るすべはない。したがって像の様式や表現の面から判断するほかない。そこで基準となるべき平安時代後期の丈六の阿弥陀像と比較する必要があるのだが、必ずしも豊富ではないものの、幸いなことに以下のような作例が残されている。

平等院像　定朝作　天喜元年（一〇五三）
法界寺像　承徳二年（一〇九八）か[12]
法金剛院像　院覚作　大治五年（一一三〇）
三千院像　久安四年（一一四八）
万寿寺像　永万元年（一一六五）か[13]
長講堂像　院尊作か　寿永三年（一一八四）頃または文治四年（一一八八）[14]

図12　阿弥陀如来坐像　西寿寺蔵　全身正面

図13　同上　頭部正面

これらの基準作[15]と西寿寺像（図12・13）を比較すると、ひかえめで誇張を抑えた体部の肉取りや、脚部に刻まれた衣文などの表現は万寿寺像（図14）に近く、また、謹直な感のある面部の表現は長講堂像（図15）と共通するものがあるように思われる。したがって本像の製作年代は万寿寺、長講堂両像の間と考えるのが妥当ではないだろうか。ちなみに、どのような史料に拠ったものかは不明であるが、『甲賀郡誌』には新宮神社では承安二年（一一七二）に社殿楼門等を重修したとの記載がある。現段階では必ずしも信がおけるものではないが、同誌の記事がしかるべき伝えによって記されたものであるならば、あるいは承安二年というのは、本像の創建年代に関してひとつの目安となるかもしれない。この『甲賀郡誌』の記載はさておくとして、基準作との比較からみても一一七〇年代を中心にそれを若干前後するあいだ、平安時代後期の最末期ころというのは、本像の製作年代として認められるものではないかと考える。

図14　阿弥陀如来坐像　万寿寺蔵　全身正面

図15　阿弥陀如来坐像　長講堂蔵　頭部正面

おわりに

西寿寺の本尊像に関して、以上のごとく、寺伝にいう移坐の経緯の検証、および基準作例との比較による製作年代の推定を行なってきた。史料および比較する作例の限られる現状の中で、強引に結論

を導いた面があったことは自覚しており、異論もあろうかと思う。しかしすくなくとも、本像が平安時代末にまでさかのぼる貴重な遺例であるということは同意していただけるのではないかと思う。

かの大仏師定朝によって完成された仏像のスタイルは、それ以降百年以上の長きにわたってわが国の仏教彫刻界を席巻した。それらを今日われわれは定朝様と称している。しかしながら、定朝本人の作として確実なものは平等院鳳凰堂の本尊である国宝の阿弥陀如来坐像しか現存せず、またその弟子たちによって作りつづけられた仏像もその作風には幅がある。定朝様ということばがよく流布している割に、その実態や様式の展開に関しては明確でない点も多いのではないだろうか。そのような状況の中で、丈六という大きさの本格的な定朝様の作例が一点あらたに加わったということは意味あることといえよう。これを契機として定朝様とその展開に関してあらためて考えてみたいと思う。

［史料］

（史料1）

『泉谷山西寿寺伝記』

城州葛野郡御室福王子村泉谷山西寿寺者
人皇一百九代後水尾院御宇寛永四丁卯歳
弁蓮社良定入観上人袋中和尚草創也
（中略）
爰ニ勢州松坂之住人北出嘉兵衛ト云仁有リ
若年之頃京都ニ登リ洛下高辻通鍛之下町ト

①

云所ニ居住シ帰依三宝慈悲深厚之人也世俗念仏嘉兵衛ト云リ
然ニ発心遁世シ朝暮詣三条法林寺帰依袋中上人
法名号三観入心居士其後当所鳴滝村ニ移住ス
其砌京都之朋友尋問シ五人合志当山ヲ買求メ
三観入心ニ寄附ス依之袋中上人招請シ累世
念仏三昧不退之道場ト成ント崩山埋谷西寿寺ヲ
建立ス初之号西寿院于時寛永四丁卯歳十一月廿一日也
為用水崩巌セシカハ従土中三光之霊石出現ス
長壱尺五寸横壱尺弐寸則当山之鎮守奉崇天照皇太神宮ト是也
右神石出現之跡ヨリ清水涌出セル故号泉谷山ト
入心者夫ヨリ八幡江移居シ結草庵寛永八辛未歳
十二月十七日向西端坐合掌如睦遂往生畢
開山袋中上人ヨリ四世迄ハ今ノ方丈ヲ本堂トシ
方丈仏ヲ本尊トス然ニ第五世中興単誉愚故上
人者智行高徳勝リ他芸州宮嶌光明院ニ住職ス
彼之寺者袋中上人之兄以八上人之建立
（中略）
愚故上人当寺ヲ伝聞シ華洛巡見之時当山
ニ来リ見タマフニ寔ニ幽渓ニシテ塵累ヲ去リ寂静無
為安楽之霊地也感喜ヲナシ発心願ヲ今之本堂
ヲ造営ス中尊ニ奉安置丈六之阿弥陀如来之
尊容者其頃江州甲賀郡杣廿二村今者九村之氏神
上野村新宮大明神之本地仏也然ニ本地堂零落
雨露難防風嵐崩倒本尊破壊ス氏人再興難成就
歳々朽損許也此事ヲ愚故上人伝聞シ万治元

②　③　④

戊戌歳弟子頼入ヲ遣上野村社僧法印同村浄
土宗善願寺村中之檀家ヲ頼ミ乞求メ駅路奉乗
三馬上京ス為替ト座像壱尺五寸之阿弥陀如来（行基御作）遣之
本尊修覆造立寄附之次第
本尊八ツニ取合継立（大仏師弟子太左衛門手間料銀三百目 浦辻宗与寄進）
曝布五拾疋（包覆 コクソ刻）　施主浦辻宗与之蓮友
漆　代銀八百目　施主右同断
塗師　（大文字屋九左衛門取持 毎日十人廿人宛来リ寄進）
金箔千体仏　諸人奉加
後光台座　（大仏師光教作代銀弐貫目 施主井川六郎兵衛）
万治二年己亥歳十月十五日成就
本堂造立　万治三庚子歳
常行念仏開白　万治元戊戌歳十月十五日
五世中興単誉愚故上人
（後略）
（後欠）

（史料2）
〈像内背面　朱漆銘〉
奉再講（ママ）大仏源信僧都御作也
為一切衆生往生極楽正周也
多小助成之輩
仏果円満无□（疑カ）者也

⑥　⑤

泉谷山西寿寺住
南無阿弥陀仏
単誉上人愚故（花押）
皆万治二年亥十月十五日

（史料3）
〈台座　朱漆銘〉
運岸宗寿
梅屋妙香
寿斎
閑室良和
清月妙意
西室宗怡
西屋宗賀
繁室智栄

奉造立蓮華台座者
為七世六親還到安楽也
一切法界一蓮宅（ママ）生无以者也
皆寛文二年寅正月廿五日
施主
竹川
庄兵衛敬白
泉谷山西寿寺住
信蓮社単誉上人

〈註〉

1 調査は、井上一稔氏（同志社大学）、高梨純次氏（滋賀県立近代美術館）、長峰透氏（甲南町教育委員会・当時）とともに行ない、楽浪文化財修理所の高橋利明氏にご協力頂いた。また、同志社大学井上研究室、楽浪文化財修理所の方々から補助して頂いた。

2 本誌併載の拙稿「作品解説　阿弥陀如来坐像（京都・西寿寺蔵）」参照。

3 この時すでに西寿寺のほうから甲南町（当時・現甲賀市）教育委員会に連絡を取り像の存在を伝え、高梨純次氏をはじめとする同町の文化財専門委員の方々が拝観に訪れていたという話を、西寿寺の村井定心住職より伺った。

4 法量の詳細は以下のとおり（単位はセンチメートル）。

像高	二七六・七	髪際高	二三九・六
頂―顎	八九・八	面長	五一・二
面幅	五〇・〇	耳張	六六・五
肘張	一七五・五	膝張	二三二・一
面奥	五六・三	胸奥（右）	六五・二
腹奥（衣含）	七五・四	膝奥	一四八・五
膝高（左）	四一・四	（右）	四二・八
体幹材　厚	三・五（背面）	六・〇（前面衣含）	五・五（上面肩）
体幹材　幅	（左前）二七・五		
	（右前）二六・五		
	（左後）二三・五		
	（右後）二六・〇		

5 米山徳馬解説『京都美術大観』彫刻上　東方書院　一九三三年

6 美術史学会『別尊京都仏像図説』臼井書房　一九四三年
ただし本書が当像を室町時代の作とするのは、像を実見していないからと思われる。おそらく本書は西寿寺像を『京都美術大観』掲載の写真をもとに執筆している。というのも本書は本像の特徴として「嵯峨式釈迦の流水文」を挙げるが、これは『京都美術大観』に本像と同一ページに所収の転法輪寺阿弥陀如来坐像の特徴であり、筆者は写真を取り違えて解説を書いたのであろう。したがって室町という時代判定は転法輪寺像に対してのものと思われる。

7 このほか近年の紹介として、甲南町（現甲賀市）の文化財専門委員の松岡長一郎氏による「京都、西寿寺訪問記」（『甲南地域史研究会』での発表）一九九九年がある。

8 『甲賀郡誌』　滋賀県甲賀郡教育会　一九二六年

9 現在神社の境内に立つ看板には、一宮が紀伊熊野大社、二宮が常陸鹿島大社、三宮が勝手大明神とある。

10 現状では入母屋造の茅葺屋根であるが、当初は二層の楼門とすることを意図して建立されたが未完成のままで終わったとのことである。

11 長峰透氏のご教示による。

12 三宅久雄氏から康平三年（一〇六〇）頃の建立という説も出されている。
三宅久雄「法界寺丈六阿弥陀仏造立考」『佛教藝術』一三八　一九八一年

13 猪川和子氏から永長二年（一〇九七）建立の六条御堂旧像という説が出されているが、井上正氏の説によった。筆者も万寿寺像の構造などからみて井上説が妥当なものと考える。
井上正「万寿寺阿弥陀如来像について」『MUSEUM』二四八　一九七一年

14 猪川和子「万寿寺阿弥陀如来像の伝来について」『MUSEUM』二五八　一九七二年
伊東史朗氏は寿永二年ころないしは文治四年とし、麻木修平氏は寿永三年とするが、両者とも作者としては院尊の可能性を想定している。
伊東史朗「妙法院普賢菩薩騎象像について」『佛教藝術』一九四　一九九三年

15 麻木修平「長講堂阿弥陀三尊像考」『佛教藝術』二一二　一九九四年
これらはみな定朝様の範疇内にあるものだが、その作風が経年によって序列的に変化しているわけではなく、かなりの幅がある。これは院派、円派といった仏師系統による違いということもあるだろうが、もととなった定朝自身の作風に、繊細さとおおらかさ、観念性と写実性といった、相反する要素が並存しており（そこが定朝の魅力なのであるが）、後継者たちが模倣するに際して、その矛盾する特徴のどちら

をより重視したかによって、おなじ定朝様の作品でも、作風に幅が生まれることとなったのではないか、と現時点で個人的には考えている。この問題に関してはあらためて考えてみたいと思っている。

［記］

本稿は平成十七年三月の美術史学会西支部例会において発表した内容に加筆・訂正したものである。
調査に際しては、西寿寺の村井定心住職からはひとかたならぬご厚誼をたまわり、ともに調査した井上一稔氏、高梨純次氏、長峰透氏にはさまざまなご助言を頂戴した。高橋利明氏ならびに楽浪文化財修理所の方々、同志社大学井上研究室の方々からもご助力をたまわった。写真掲載にあたっては、東福寺の永井慶洲寺務長、長講堂の稲葉是邦住職よりご高配たまわった。また、本稿の図版ならびに図11～15は金井杜男氏による撮影である。文末ではあるがお名前を記し感謝の意を表したい。